

## 教育相談

### コミュニケーション能力や人間関係を築く力を身に付けるための 適応指導プログラムの開発

教育相談課 指導主事 清藤 みどり（執筆責任者），三和 明久  
島浦 靖，齋藤 美鈴

## 要 旨

不登校児童生徒のコミュニケーション能力や人間関係を築く力を育成するために、適応指導プログラムとして、体験活動に加え、心理検査等により不足しているソーシャルスキルを明確にした上で、人間関係プログラム【構成的グループエンカウンター（以下、SGE とする）とソーシャルスキルトレーニング（以下、SST とする）】を実施した。その結果、不足しているソーシャルスキルの向上に一定の効果があった。

キーワード：不登校 適応指導 人間関係プログラム 構成的グループエンカウンター  
ソーシャルスキルトレーニング ソーシャルスキル尺度

## I 主題設定の理由

文部科学省の学校基本調査によると、全国の不登校児童生徒数は平成20年度から減少傾向が続いているものの、その減少率は低く、これまでに引き続き、不登校の未然防止や不登校児童生徒への支援充実のため、効果的な適応指導プログラムの研究や開発が必要とされている。

当センター適応指導教室においては、これまで、体験活動プログラムと人間関係プログラムの相乗効果による社会性の向上を目指した適応指導プログラムを実施し、適応指導教室へ通所する児童生徒（以下、通所生とする）の心的エネルギーは大きく向上した。しかし、ソーシャルスキルの向上は不十分であり、プログラムの効果が十分に得られたとは言えない。そのため、通所生のコミュニケーション能力や人間関係を築く力を身に付けさせるためには、指導が必要なソーシャルスキルを明確にした上で、人間関係プログラムを計画・実施するなど、より効果的な適応指導プログラムの開発が必要であると考え、本主題を設定した。

## II 研究目標

適応指導教室の児童生徒のコミュニケーション能力や人間関係を築く力を身に付けさせるために、指導が必要なソーシャルスキルを明確にした上で人間関係プログラムを開発し、体験活動プログラムと組み合わせることで効果的に実施することにより、その有効性を明らかにする。

## III 研究仮説

指導が必要なソーシャルスキルを明確にした上で、人間関係プログラムを開発し、体験活動プログラムと組み合わせることで効果的に実施することにより、心的エネルギーや活動性が高まるとともに、コミュニケーション能力や人間関係を築く力が向上するであろう。

## IV 研究の実際とその考察

### 1 平成23年度実践の概要と結果

平成23年度実施の適応指導プログラムを図1に示した。体験活動プログラムでは、自然体験活動として、ふれあいサマーキャンプ（7月）、雲谷ウォーク（9月）を、また社会体験活動として、ボランティア体験（動物）を3回（5～6月）、ボランティア体験（職場）を2回（11月）、文化祭（10月）、人間関係プロ

グラムについては、SGE を6回、SST を8回実施した。以下は、その概要である。

(1) 体験活動プログラムの概要

ア ふれあいサマーキャンプ

(ア) 概要

- ・期日 7月6日(水)～8日(金) 3日2泊
- ・目的 豊かな自然環境や日常とは異なる生活環境の中での集団生活や体験的活動を通して、通所生・指導員相互の触れ合いを深める。また、集団への適応能力と生活意欲を高めるとともに、成就感を味わわせ、自己肯定感の高揚を図ることにより、特別な配慮を必要とする児童生徒にコミュニケーション能力や人間関係を築く力を身に付けさせる。

・場所 小川原湖青年の家

- ・内容 [1日目] オリエンテーリング(4km)、野外炊飯、キャンプファイヤー
- [2日目] 野外炊飯、いかだづくり、しじみ貝採り、夜の集い
- [3日目] 野外炊飯、創作体験(レザークラフト)

(イ) 配慮事項

- ・通所生・指導員相互の触れ合いを深めるために、野外炊飯やオリエンテーリング、いかだづくり、夜の集いではグループをつくる等、協力しての作業や活動を随所に設定した。

(ウ) 通所生の様子

- ・食材の買い物をグループ単位で行った。あらかじめ係の通所生が準備したリストに従いながらも、少しでも安い値段で買ったり、求める食材がなければ店員に聞いたりする等、工夫しながら協力して買い物をすることができた。
- ・4kmを歩くオリエンテーリングでは、体調の悪さ等を理由に挙げて途中で離脱しようとした通所生もいたが、同じグループの通所生の励ましにより最後まで歩き続け、完歩後は充実感を感じていた様子であった。
- ・悪天候により、急遽予定を変更したプログラムもあったが、柔軟に対応できていた。

イ 雲谷ウォーク

(ア) 概要

- ・期日 9月22日(木) 1日
- ・目的 長い距離をみんなで励まし合い、助け合いながら歩くことを通して、通所生・指導員相互の連帯感を深める。また、長い距離を歩き通すことができたという達成感を味わわせ、自己肯定感の高揚を図ることにより、特別な配慮を必要とする児童生徒にコミュニケーション能力や人間関係を築く力を身に付けさせる。

・場所 モヤヒルズ(青森市雲谷スキー場)

・内容 モヤヒルズまでの徒歩(8km)、現地でのバーベキュー、スポーツ活動

(イ) 配慮事項

- ・当日までに、フリータイムを利用してできるだけ運動する機会をもつよう、通所生に働きかけた。
- ※台風の接近のため、安全面を考慮し、中止した。

ウ ボランティア体験(動物)

(ア) 概要

- ・期日 5月13日(金)・5月27日(金)・6月10日(金) 3日
- ・目的 犬のしつけ訓練・散歩等、動物との触れ合いを通して心を癒し、人との温かな交流を図ることにより、特別な配慮を必要とする児童生徒にコミュニケーション能力や人間関係を築く力を身に付けさせる。

・場所 青森県動物愛護センター

・内容 動物との触れ合い、犬のシャンプー、散歩及びしつけ訓練、うさぎ・ねこのブラッシングと餌やり、馬の世話及び乗馬体験、入館者の案内、等

(イ) 配慮事項

- ・動物との関わりを深めるために、個人ごとに動物のグループを選択させ、動物の世話をさせた。

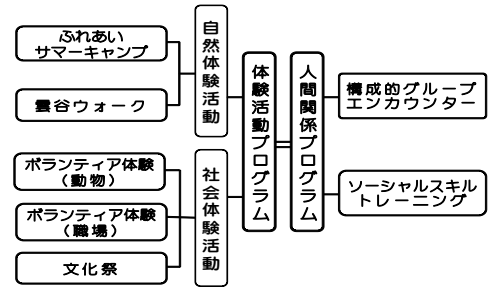


図1 適応指導プログラム(H23年度)

- ・動物や人との関わりの段階を考慮した実施記録表を作成し、通所生自身が活動を振り返って記入できる様式にした。
- ・動物が苦手な通所生には、餌の準備や清掃等、動物に直接触れない世話をさせた。

(ウ) 通所生の様子

- ・同じ動物に関わりながら、普段あまり話さない通所生同士が話をしたり、助け合って作業をしたりする様子が多く見られた。
- ・実施記録表へ記入しながら自身の活動を振り返ることで、できたことへ自信をもったり、通所生同士で活発に感想を話し合ったりする様子が見られた。

エ ボランティア体験（職場）

(ア) 概要

- ・期日 11月11日（金）・11月25日（金） 2日
- ・目的 幼稚園・保育園を体験訪問し、小さな子どもとの触れ合いを通して活動性を高め、また、働くことの喜びや社会の一員としての立場を体験的に理解させることにより、特別な配慮を必要とする児童生徒にコミュニケーション能力や人間関係を築く力を身に付けさせる。
- ・場所 浪打カトリック幼稚園、佃保育園
- ・内容 小さな子どもとの触れ合い、活動の援助等

(イ) 配慮事項

- ・幼稚園・保育園への2回の訪問の間隔を短くして、関わる園児たちとのコミュニケーションがより深まるようにした。
- ・自主性を促し、働くことの実感を感じられる活動になるように、幼稚園と保育園のどちらに訪問するか、どの教室を担当するかについて、それぞれの特徴を説明し通所生に選択させた。

(ウ) 通所生の様子

- ・1回目の体験を生かし、2回目は活動がスムーズにできた。2回目の訪問では通所生を覚えている子どもが多くいて、通所生も嬉しそうだった。活動性の向上にもつながった。
- ・園児が近寄ってきても、うまく話せなかったり、思うように動けなかったりする通所生もいたが、指導員等が言葉をかけながら一緒に活動することで関わりをもつことができた。
- ・将来の職業選択を考えるきっかけとなり、「保育士になりたい」と話す通所生もいた。

オ 文化祭

(ア) 概要

- ・期日 10月13日（木） 1日
- ・目的 文化祭における作品展示や集会活動等を通し、特別な配慮を必要とする児童生徒のコミュニケーション能力や人間関係を築く力を育み、自己表現能力や自主性、集団適応能力を高める。
- ・場所 青森県総合学校教育センター
- ・内容 作品展示、集会活動、創作体験活動、等

(イ) 配慮事項

- ・個人ごとに係活動を選択させて自主性を促すとともに、グループで協力して準備を進めることで通所生同士のコミュニケーションを深めることができるようにした。
- ・コミュニケーション能力の向上へつなげるために、来所者へ展示物の内容や、創作体験活動の手順について説明をする場面を設定した。

(ウ) 通所生の様子

- ・自分の作品について来所者へ説明をすることで作品への評価を直接聞くことができ、嬉しそうな表情をみせる通所生が多く見られた。
- ・係活動を進める中で、活動への負担や不安を感じ休みがちになる通所生が数名見られた。

(2) 人間関係プログラムの概要

人間関係プログラムの選定については、上野・岡田（2006）のソーシャルスキル尺度を使用した。3領域48項目で構成され、回答は4件法からなり、0～3点を与えている。この尺度を用いて、通所生自身の評価による得点平均が下位のスキルと、担当相談員の評価平均による得点平均が下位のスキル、及び通所生自身の評価平均と担当相談員の評価平均に有意差が認められたスキルをそれぞれ取り上げ、それを指導が必要なスキルとした上でスキル向上のための支援を計画し（表1）、さらに、体験活動プログラムと関連付けることで効果的になるよう実施した（表2）。



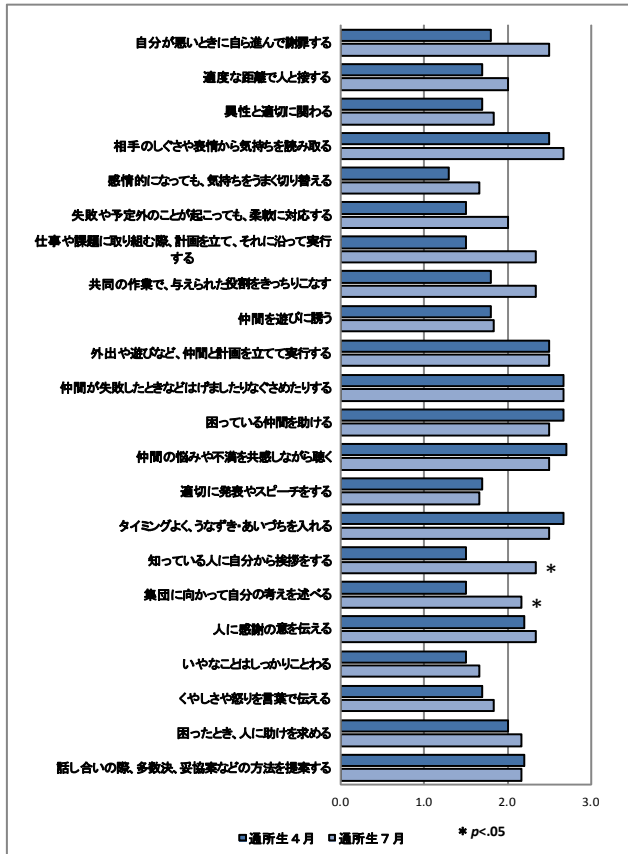


図2 通所生自身によるソーシャルスキル尺度による評価（4月・7月）

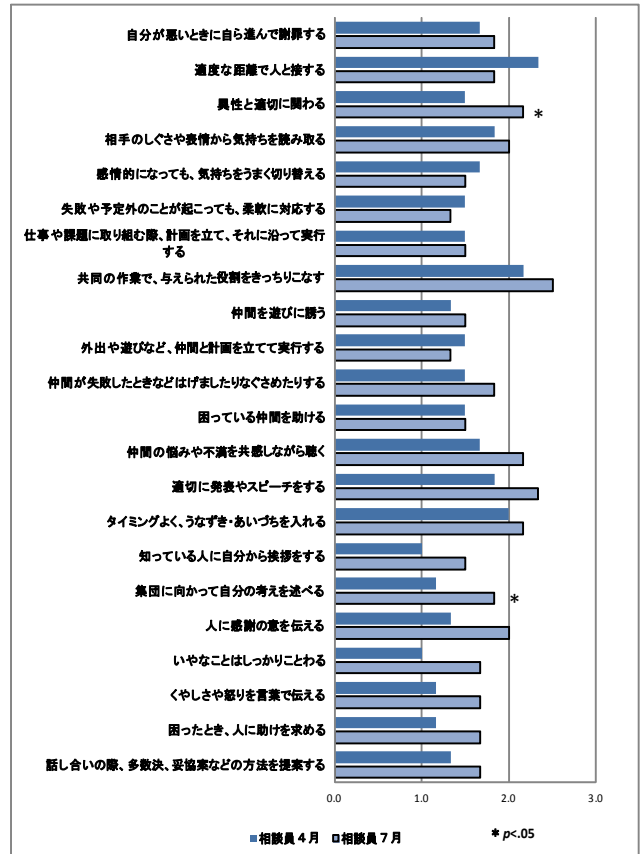


図3 担当相談員によるソーシャルスキル尺度による評価（4月・7月）

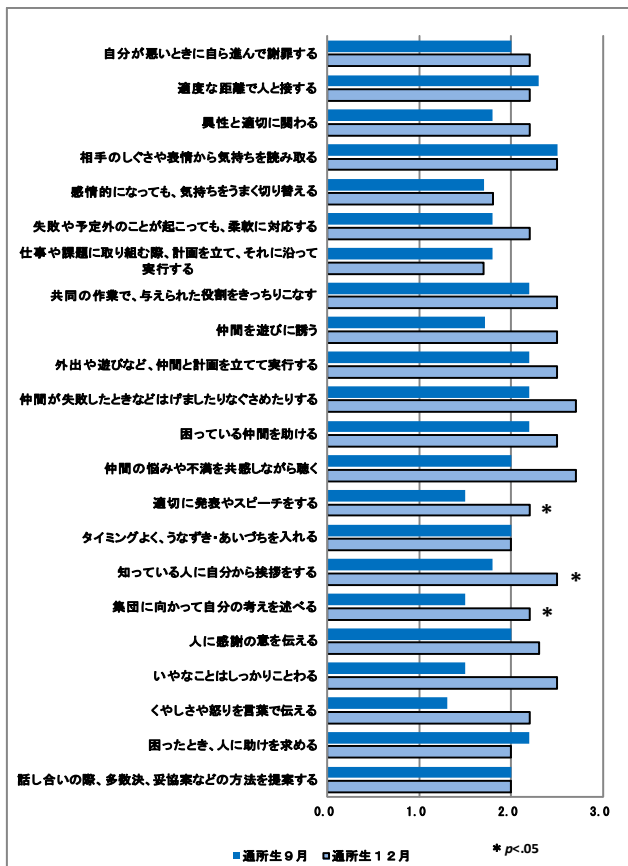


図4 通所生自身によるソーシャルスキル尺度による評価（9月・12月）

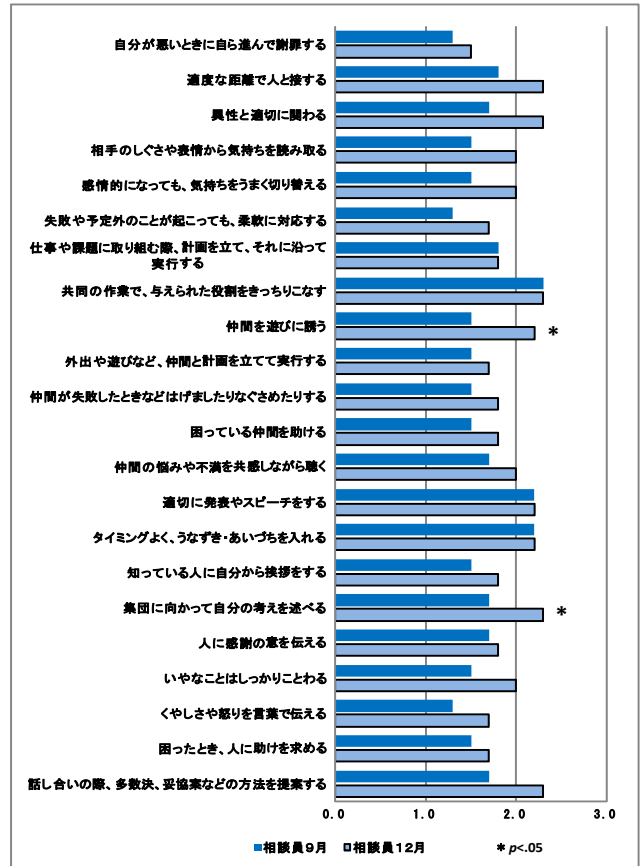


図5 担当相談員によるソーシャルスキル尺度による評価（9月・12月）

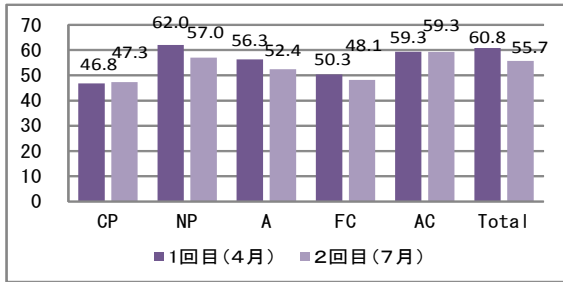


図6 AN-エゴグラムの結果（4月・7月）

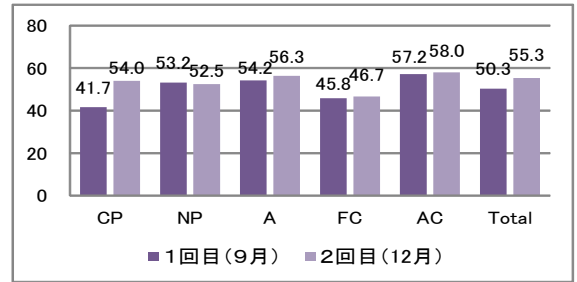


図7 AN-エゴグラムの結果（9月・12月）

実施したことが、通所生のソーシャルスキル向上に一定の効果があったと考えられる。また、AN-エゴグラムの結果から、一連の適応指導プログラムの体験により、責任感や心的エネルギーがやや増したものと考えられる。

## 2 平成24年度実践の概要と結果

平成24年度実施の適応指導プログラムを、図8に示した。平成23年度においては不登校児童生徒のソーシャルスキル向上に一定の効果があったと考えられるものの、不登校児童生徒が再登校を目指して通所する適応指導教室の性質上、通所生の通所期間がそれぞれ異なり、4月～7月、9月～12月のそれぞれの期間に調査対象となった通所生は同一ではない。また、適応指導プログラムへの参加にもばらつきがあるため、通所生の年度途中における増加を考慮し、一定期間で区切ったプログラムを設定する必要があると考えた。

そこで、平成24年度は、体験活動プログラム、人間関係プログラムともに前期（4月～7月）と後期（8月～2月）の2期に分けて計画・実施し、前期、後期それぞれの開始時期に合わせてソーシャルスキル尺度により指導が必要なソーシャルスキルを明確にした。その上で人間関係プログラムを計画して体験活動プログラムと組み合わせ、より効果的に配列・実施することにより、コミュニケーション能力や人間関係を築く力の向上を図ることとした。

体験活動プログラムについては、自然体験活動と社会体験活動を二つの柱にし、自然体験活動として、キャンプⅠ（7月）、キャンプⅡ（10月）、社会体験活動として、ボランティア体験（動物）を4回（5～6月、9月）、文化祭（11月）、人間関係プログラムについては、SGEとSSTを合わせて前期4回、後期5回実施した。以下はその概要である。

### (1) 体験活動プログラムの概要

#### ア キャンプⅠ

##### (ア) 概要

- ・ 期日 7月9日（月）～10日（火） 2日1泊
- ・ 目的 豊かな自然環境や日常とは異なる生活環境の中での集団生活や体験的活動を通して、通所生と指導員、相互の触れ合いを深める。また、集団への適応能力と生活意欲を高めるとともに、成就感を味わわせ、自己肯定感の高揚を図ることにより、特別な配慮を要する児童生徒にコミュニケーション能力や人間関係を築く力を身に付けさせる。
- ・ 場所 小川原湖青年の家
- ・ 内容 [1日目] いかだづくり、しじみ貝採り、野外炊飯、キャンプファイヤー  
[2日目] 野外炊飯、オリエンテーリング

##### (イ) 配慮事項

- ・ 昨年度のキャンプでは、野外テントでの宿泊に慣れないために眠れなかったり、2泊3日という長い日程に躊躇して参加を取り止めたりした通所生が数名みられたため、宿泊を室内に変更し、日程は1泊2日に短縮した。
- ・ プログラムは人間関係づくりのきっかけが生まれるように配慮し、調理やいかだづくり等のグループ活動を設定したり、話し合う場面や協力する場面を多く取り入れたりした。

##### (ロ) 通所生の様子

- ・ 行きのバスで移動中、「周囲の会話にうまく合わせるのに気遣いして疲れた」と話し、食材の買い物

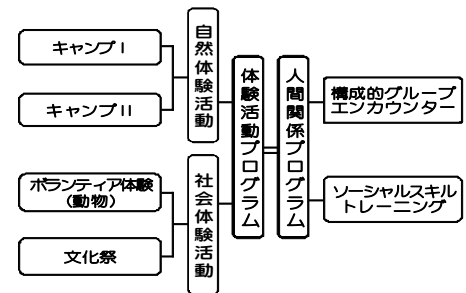


図8 適応指導プログラム（H24年度）

に参加できなかった通所生がいたが、休憩した後は全ての活動に参加することができた。

- ・食事の準備や後始末、各プログラム中は、お互いに声をかけて手順を考えたり、協力したりして作業する姿が見られた。

## イ キャンプⅡ

### (ア) 概要

- ・期日 10月15日（月）～16日（火） 2日1泊
- ・目的 大自然や日常とは異なる生活環境の中での活動を通して、通所生・指導員相互の触れ合いを深めるとともに、自立心を育み、生活意欲や集団への適応能力を高める。
- ・場所 梵珠少年自然の家
- ・内容 [1日目] アドベンチャービンゴ、キャンドルサービス  
[2日目] フィールドビンゴ、創作活動（森からのプレゼント）

### (イ) 配慮事項

- ・人間関係づくりのきっかけが生まれるようにするために、野外活動やフィールドビンゴではグループ活動を設け、キャンドルサービスでは自己開示して話すことができるようにスタッフが雰囲気づくりをする等、場の設定を工夫した。

### (ウ) 通所生の様子

- ・起床時間や食事等が普段の生活と異なっていた通所生もいたが、望ましい生活時間を体験する良い機会となったようである。
- ・創作活動で完成した作品を文化祭で展示することで、二重に達成感を味わえた様子であった。

## ウ ボランティア体験（動物）

### (ア) 概要

- ・期日 5月28日（月）・6月8日（金）・9月11日（火）・9月28日（金） 4日
- ・目的 犬のしつけ訓練・散歩等、動物との触れ合いを通して心を癒し、人との温かな交流を図ることにより、特別な配慮を必要とする児童生徒にコミュニケーション能力や人間関係を築く力を身に付けさせる。
- ・場所 青森県動物愛護センター
- ・内容 動物との触れ合い、犬のシャンプー、散歩及びしつけ訓練、うさぎ・ねこのブラッシングと餌やり、馬の世話及び乗馬体験、入館者の案内、等

### (イ) 配慮事項

- ・動物との関わりを深めるために、個人ごとに関わる動物を選択させ、世話をさせた。
- ・動物や人との関わり方の段階を考慮した実施記録表を作成し、通所生自身に記入させた。
- ・動物が苦手な通所生には、餌の準備や清掃等、動物に直接触れない世話をさせた。

### (ウ) 通所生の様子

- ・好きな動物に関わることで癒しを感じたり、子犬の心音を聴いて命の大切さを感じたりした通所生が見られた。
- ・同じ動物に関わりながら、普段あまり話をしたことがない通所生同士が話をしたり、助け合って作業をしたりする様子が多く見られた。
- ・実施記録表へ記入しながら自身の活動を振り返ることで、できたことに自信をもったり、通所生同士で活発に感想を話し合ったりする様子が見られた。

## エ 文化祭

### (ア) 概要

- ・期日 11月20日（火） 1日
- ・目的 文化祭における作品展示や集会活動等を通し、特別な配慮を必要とする児童生徒のコミュニケーション能力や人間関係を築く力を育み、自己表現能力や自主性、集団適応能力を高める。
- ・場所 青森県総合学校教育センター
- ・内容 作品展示、集会活動、創作体験活動、等

### (イ) 配慮事項

- ・係活動や活動内容を選択させて自主性を促すとともに、グループごとの活動を増やすことで協力して準備を進め、通所生同士のコミュニケーションを深めることができたようにした。
- ・コミュニケーション能力の向上へつなげるために、来所者へ展示物の内容や創作体験活動の手順につ

いて説明をする場面を設定した。

(ウ) 通所生の様子

- ・自分の作品について家族や学級担任等の来所者へ説明をしたり、一緒に創作活動を行ったりすることで、コミュニケーションが促進されていた。
- ・係活動をグループごとに進める中で、リーダーシップをとったり、自主的に活動したりする通所生が多く見られた。

(2) 人間関係プログラムの概要

通所生の年度途中における増加を考慮し、より実態に即した効果的な人間関係プログラムを実施するために、4月のソーシャルスキル尺度による評価を用いて前期（4～7月）の支援計画を、7月のソーシャルスキル尺度による評価を用いて後期（8～2月）の支援計画を作成した。その際、それぞれ体験活動プログラムと組み合わせにより、コミュニケーション能力や人間関係を築く力の向上を図ることを目指した。また、人間関係プログラムを計画するための指導が必要なスキルの選定については、より客観的に実態を捉えるため、通所生本人の評価ではなく複数の相談員によるソーシャルスキル尺度評価の平均値を用い、その結果から下位5項目を指導が必要なスキルとして選択し、スキル向上のための支援計画を作成した（表3）。

後期の計画を立てるに当たっては、小学生の通所生1名も対象に含まれており、中学生対象のソーシャルスキル尺度とは項目が異なるため、中学生とは別に指導が必要なスキルを選定した（表4）。

(3) 実践研究による通所生の変容

通所生に対して、ソーシャルスキル尺度による評価とAN-エゴグラムをそれぞれ3回（4月、7月、12月）実施し、その変容を比較して適応指導プログラムの効果を測定した。

ア 前期

通所生5名（男1名、女4名）について、4月における複数の相談員によるソーシャルスキル尺度評価の結果から、指導が必要なスキルを7項目選定して人間関係プログラムを実施した。その結果、4月から7月にかけて、ソーシャルスキル尺度による評価では全ての得点平均が上昇し、その中でも5項目において有意に得点平均の上昇が認められた（図9）。

さらに、選定した指導が必要なスキル以外の項目においても、41項目中38項目において得点平均が上昇し、その中でも15項目において有意に得点平均の上昇が認められた（表5）。

AN-エゴグラムの結果については、全ての項目において低下した。また、有意差は認められなかった

表3 選定した指導スキルとスキル向上のための支援計画（H24年度前期）

スキル	分類	項目	プログラム	日常指導	スキル向上のための支援
集団行動	課題遂行	失敗や予定外のことが起こっても、柔軟に対応する		○	視覚に訴える掲示物等の工夫個に応じたソーシャルストーリーの作成
仲間関係	仲間への援助	仲間の悩みや不満を共感しながら聴く		○	SST「上手な聴き方」「ふわふわ言葉・チカラ言葉」
コミュニケーションスキル	アサーション	非言語的スキル 身振りや手振りなどをうまく使って表現する		○	SGE「身振り手振り新聞紙の使い道」
		くやしさを言葉で伝える		○	SST「私のストレス対処法」表情シールを活用した振り返り
		親しい人に不安や心配なことを話す		○ ※1	※SST「みんなで探そう！ヘルプサイン」 担当者との面接相談で支援
		困ったとき、人に助けを求める		○ ※1	※SST「みんなで探そうヘルプサイン」
		話し合いの際、多数決、妥協案などの方法を提案する		○	行事の計画を立てたり、係活動の話し合いの際に支援する

※1 指導が必要なスキル二つを、一つのプログラムで支援する。  
 ※2 得点平均下位5項目を取り上げているが、得点が同値のもの全てを選択しているため、総数が7項目となっている。

表4 選定した指導スキルとスキル向上のための支援計画（H24年度後期）

区分	スキル	分類	項目	プログラム	日常指導	スキル向上のための支援
中学生	行集助団	状況理解・こころの理論	冗談や皮肉などの裏の意味のある言葉を理解する		○	SST「雑談しよう」
			仲間と冗談を言い合う		○	
	仲間関係	仲間への援助	外出や遊びなど、仲間と計画を立てて実行する		○	行事の計画を立てたり、係活動の話し合いの際に進行をさせる等、支援する
			仲間が失敗したときなどはげましたりなくさめたりする		○	SST「あたたかい言葉かけ」
小学生	コミュニケーションスキル	アサーション	非言語的スキル 身振りや手振りなどをうまく使って表現する		○	日常活動の中で、ジェスチャーゲーム等を取り入れる
			くやしさを言葉で伝える		○	SST「いろんな気持ち」
			親しい人に不安や心配なことを話す		○	担当者との面接相談で支援
			困ったとき、人に助けを求める		○	SST「もしもの時のヘルプカード」
集団行動	対人マナー		よいことをしてもらったら「ありがとう」と言って感謝できる		○	SST「こんなとき何て言う」
			いけないことをしてしまったら「ごめんなさい」と謝ることができる		○	
			状況に合わせた適切な言葉づかいができる（目上の人に敬語を使う、知らない人になれない言葉づかいをしないなど）		○	
コミュニケーションスキル		話す	言葉たらずでなく、話すことができる		○	発表する際に支援する
		話し合い	指名されたら、議長や進行役などのまめ役を行うことができる		○	行事の計画を立てたり、係活動の話し合いの際に進行をさせる等、支援する



ものの、NPとAを除く各項目が5点以上低下した(図10)。

#### イ 後期

通所生7名(男1名,女6名)について,7月における複数の相談員によるソーシャルスキル尺度評価の結果から,指導が必要なスキルを13項目選定して人間関係プログラムを実施した結果,中学生の選択スキル8項目における得点平均については,7月から12月にかけて有意差は認められず,大きな変容は見られなかった(図11)。さらに,選定した指導が必要なスキル以外の項目においては,「相手のしぐさや表情から気持ちを読み取る」の1項目において有意に得点平均の上昇が認められたものの,他の項目に大きな変容はみられなかった。

一方,小学生の選択スキル5項目においては,全ての項目で得点平均が大きく上昇した(図12)。

AN-エゴグラムの結果においては,NPにおいて,有意に得点の減少が認められ,一方でAにおいて,有意に得点の上昇が認められた(図13)。

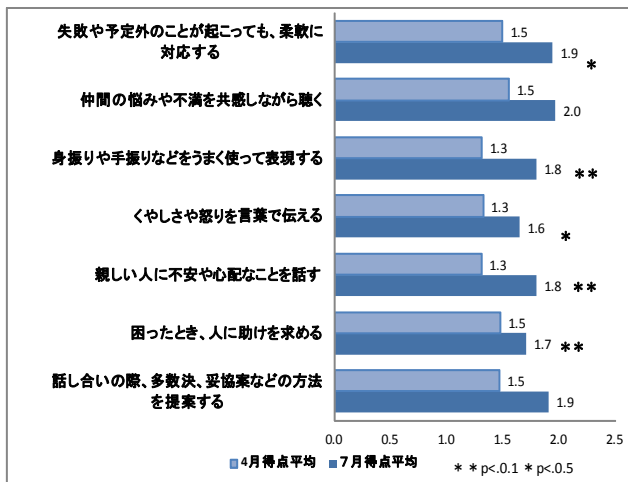


図9 相談員によるソーシャルスキル尺度の評価 (4月・7月)

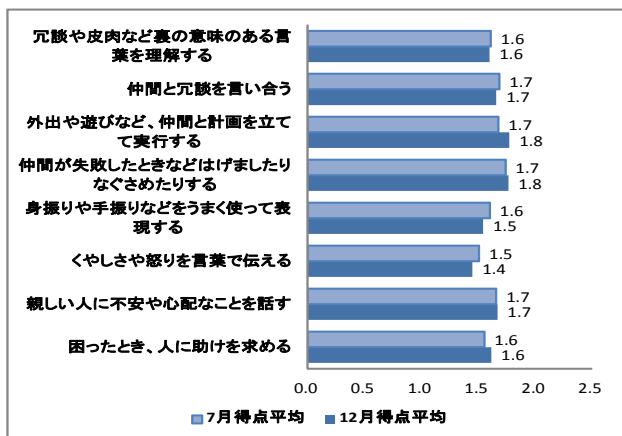


図11 相談員によるソーシャルスキル尺度の評価 (中学生7月・12月)

表5 選定した指導スキル以外に有意に得点平均が向上したスキル

スキル	分類	項目	有意差
集団行動	対人マナー	状況に合わせた適切な言葉づかいができる(敬語やくだけた言葉の使い分けなど)	**
		自分が悪いときに自ら進んで謝罪する	*
		相手の話に関心を示しながら聞く	**
セルフコントロール	自分のした行動をふりがえる	**	
仲間関係スキル	仲間関係の開始	適度に視線を合わせて人と話すことができる	**
		仲間を遊びに誘う	**
	仲間関係の維持	仲間と会話を続ける	**
		仲間が失敗したときなどはげましたりなぐさめたりする	*
コミュニケーションスキル	聞く話す	適切に発表やスピーチをする(正しい姿勢,わかりやすいように話すなど)	*
		非言語的スキル	タイミングよく,うなずき・あいづちを入れる
	アサーション	知っている人に自分から挨拶をする	**
		集団に向かって自分の考えを述べる	**
		人に感謝の意を伝える	*
話し合い	いやなことははっきりことわる	*	
話し合い	話し合いの内容にそった発言をする	*	

\*\* p<0.1 \* p<0.5

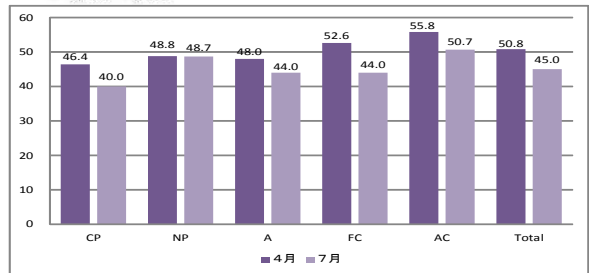


図10 AN-エゴグラムの結果 (4月・7月)

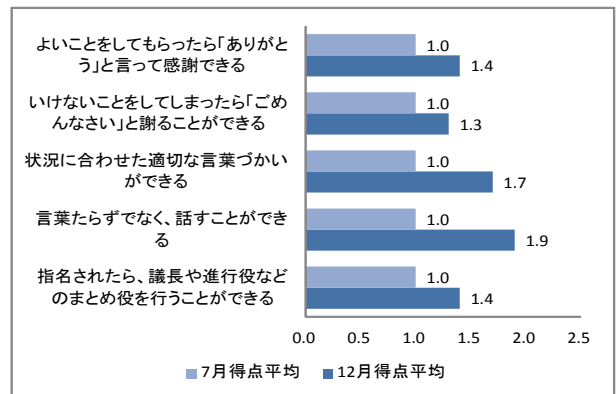


図12 相談員によるソーシャルスキル尺度の評価 (小学生7月・12月)

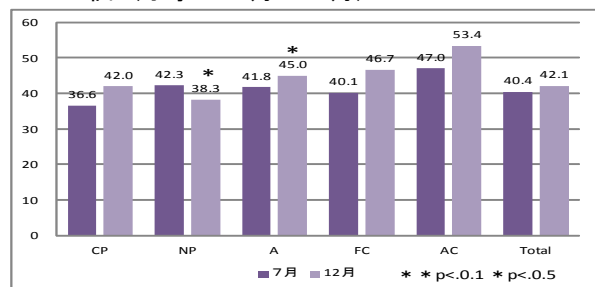


図13 AN-エゴグラムの結果 (7月・12月)

#### (4) 考察

前期において,ソーシャルスキル尺度による評価が大きく上昇したのは,指導が必要なスキルに目標を

しぼった人間関係プログラムが効果的であったことに加えて、プログラム中のシェアリング（気持ちの分かち合い）やフィードバック（スキルの評価の伝え合い）の場面で発表活動を経験したことや、学習したスキルが一般化されるように日頃の集会活動において振り返りを継続したことにより、選定したスキル以外のソーシャルスキルも向上したものと考えられる。

また、AN-エゴグラムの結果において、全ての項目で得点が減少したことから、ソーシャルスキルの向上とは関わりなく、心的エネルギーが低下したことが考えられる。

一方、後期においては、ソーシャルスキル尺度による評価があまり上昇しなかった。これは前期のプログラムを実施後すぐにソーシャルスキルが向上しており、後期のプログラムを計画した時点でスキルが底上げされた状態であったため、伸び幅が少なかったと考えることができる。しかしながら、対象者は1名のみであるが、小学生については大幅にソーシャルスキルが向上し、プログラムの効果を実感することができた。

また、AN-エゴグラムの結果においては、NPを除く全ての項目で得点が上昇し、合計得点も上昇していることから、通所生の心的エネルギーが高まったと考えられる。

## V 研究のまとめ

本研究による適応指導プログラムにおいて、通所生のソーシャルスキル尺度による評価の結果から指導が必要なスキルを選択し、それらのスキル向上をねらいとした人間関係プログラムを実施したことが、不登校児童生徒のソーシャルスキル向上に一定の効果を及ぼし、コミュニケーション能力と人間関係を築く力が身に付いてきているものと考えられる。

特に、平成24年度前期においては、通所生のソーシャルスキルに大きな向上がみられた。これは、人間関係プログラムを計画するための、指導が必要なスキルを選定するにあたり、より客観的に実態を捉えるために複数の相談員によるソーシャルスキル尺度評価平均を用いたことや、適応指導教室通所開始から間もない通所生にとって、適応指導プログラムが与えた影響が大きかったこと等が要因となったものと推察することができる。

しかし、平成24年度後期においては、通所生のソーシャルスキル向上に停滞がみられたことから、指導が必要なスキル、つまり、できないことや苦手なことに焦点化したプログラムを実施し続けたことが、プログラムへの参加意欲低下を招く等、人間関係プログラムの効果が低下したものと推察することができる。

また、AN-エゴグラムの結果においては、適応指導プログラムと関連した明らかな変容が得られなかったことから、本研究における適応指導プログラムの効果が、通所生全体の性格的特徴に影響を及ぼすまでには至っていないことがうかがえる。

## VI 本研究における課題

本研究の調査対象となった不登校児童生徒は、再登校を目指して通所する適応指導教室の性質上、児童生徒の通所頻度や適応指導プログラムへの参加率にばらつきがあるため、1年間の活動を通してプログラムの効果を測定し、プログラムとその成果の信頼性を検証することが難しい。したがって、検証方法を再考する必要がある。

また、全体指導に参加することが難しい等、一部の適応指導プログラムにしか参加することができない通所生について、個別指導によりプログラムを実施する等の支援を行うとともに、さらに効果の測定方法を再考する必要がある。

### <引用文献>

- 1 上野一彦・岡田智（編著） 2006 『特別支援教育 [実践] ソーシャルスキルマニュアル』, pp. 140-147, 明治図書出版株式会社

### <参考文献>

- 東京大学医学部心療内科TEG 研究会（編） 2006 『新版TEG II 解説とエゴグラム・パターン』 金子書房
- John M. Dusay 2000 『新装版 エゴグラムーひと目でわかる性格の自己診断』 創元社